

宮崎はいつにない暖冬でしたが、日ごとに新しい生命の息吹を感じ、桜も開花を迎える季節となりました。

皆さん、ご卒業おめでとうございます。宮崎県立看護大学は、只今、第19期学部卒業生109名、第2期別科助産専攻修了生14名、大学院博士前期課程修了生3名の計126名に卒業証書、学位記、修了証書を授与いたしました。

本学の教職員を代表して、心からお祝いを申し上げますとともに、皆様のこれまでの努力に深く敬意を表します。

また、今日まで皆さんを育て励ましてこられた御家族の方々のお喜びもひとしおではないかと思えます。本当におめでとうございます。

さらに、実習の場でご指導をいただいた関係者の皆様、日頃から、本学の運営にご協力をいただいている後援会の皆様には、深く感謝申し上げます。

なお、本日は、宮崎県知事河野俊嗣様、宮崎県議会議長蓬原正三様をはじめ、多くのご来賓の皆様にもご臨席を賜り、厚くお礼を申し上げます。

さて、卒業・修了された皆さんは本学で、どのように過ごされたでしょうか。

学部卒業生の皆さんは、看護とは、日進月歩する医療の一端を担うだけでなく、看護職が果す役割は幅広いことを学ばれたことと思えます。

病いを持つ方への看護、新たな命を授かり健やかに育てたいと願っている方へ看護、元気で地域の一員であり続け天寿を全うしようとする方への看護、そして生涯を終えようとする方への看取りは、時代が変わろうと、そこに人の命があり生活がある限り変わらずにあるものであり、看護の広さと深さを学ばれたことと思えます。

本学では、皆さんが体験したことを、仲間、教員さらには実習指導者と振り返り、省察することで、その体験を客観視し、一人ひとりにあったより良い看護を探求し、自らも成長することを教育の理念としています。本学は皆さんがこの省察の過程を十分に踏む者であったと証しました。

別科助産専攻修了生の皆さんには、全国的にみても出生率の高い宮崎県で、「県民が安心して子どもを産み育てることを担う助産師」になっていただきたく、今後は、助産の実践を積み重ね、より自立した助産師として活躍されることを期待します。

大学院修了の皆さんは、これまでの自らの看護実践の中に、より深めたい課題や問いを持ち、それに対して、既にどのようなことが明らかなのかを確認し、看護の実践あるいは教育に生かせる研究を行ってこられました。今後は、その成果をそれぞれの場で活用し、より質の高い看護の種をまいてほしいと思えます。

これから新たにあるいは改めて社会人としての一步を踏み出そうとしている皆さんは、少子高齢社会の中で、日本の未来を担う専門職として活躍が期待されています。

しかしながら一方で昨今の米国、中国、ロシア、EU諸国等の動向や地球の温暖化、あるいはAIの飛躍的な進歩や急速な情報化の進展と、その影響を受けた第4次産業革命とも言われる産業構造の急激な変化などを知るにつけ、これから10年先の世界、日本がどのよ

うな社会になっていくのか予測できない時代になってきております。

社会の仕組みや価値観も大きく変化する時が到来しており、皆さんをはじめ我々全員が、この変革の担い手でもあり、傍観者ではいられない時代に突入しているのだと思います。

このような時代においては、「これまでそうしていたから」や「そう決めてきているから」など、前例や慣習にとられることなく、改めて各自が自分自身で物事を考えることが重要になると思います。「他の国のやり方をまねて」や「この看護の方法は理論で裏づけられているから良いのだ」といった、既存の方法では解決できない事柄が多くなると思います。このような状況においてこそ、「何故私はこれまでのそれを善しとして来ていたのだろうか」と、既に身に付けていた自分の価値感やものの見方を振り返り、客観化し、自分で考え、さらに他の人と対話することで、それぞれの考えを知り、その意見を尊重しつつも、自分で判断し、新たなものを生み出していくことが大切です。

大学という高等教育の場は、既にあるものをうのみにするのではなく、改めて吟味し省察し、討議する自由が保障される場であり、本学もこのことを第一義にしてきました。

この大学で学び、身に付けたことに自信と誇りをもって、専門職であるとともに、新しい価値や仕組みを作る社会の一員として歩み続けることを、皆さんに大いに期待し、私のはなむけの言葉といたします。

平成 31 年 3 月 15 日

公立大学法人宮崎県立看護大学

学長 平野 かよ子